

## 生涯学習の鎖国状態から脱け出すために

内山 充

立花 隆氏が、テレビ番組の中で、今や「第3の鎖国」時代に入っているのではないかという危惧の念を述べておられた。第1の鎖国は徳川時代、第2の鎖国は太平洋戦争時代であることは誰も認めるところである。そして現在は、国内外の情報が何時でも何処でも手に入る時代であるのに、と一瞬奇異な感じを受ける。しかし立花氏によれば、情報検索のほとんどが日本語、あるいは身の回りの情報源に頼りすぎるために、ともすると日本国内からの情報、あるいは前例や類似環境の情報に満足し、捉われて、世界はどのような情勢になっているのか、あるいは他分野では何が起きているのかというような、外に目を向けることが極めて少なくなっているということである。考えてみると、薬剤師の生涯学習に関しても、まさに同様のことが言える。

第一に、薬剤師は往々にして、他の医療職の現状と動向について無関心であることが多い。医師や看護師の卒後教育あるいは生涯研修について、大学がどのように参画し、職域団体がどこまで関与し、専門領域を標榜する学会活動がどの程度あり、薬剤師と一緒に参画できる学会や生涯研修の場がどこにあるか、等の情報に疎い。

また、薬剤師に一番大切な「生涯を通じた職能向上」に必要な学習体制や、設定すべき目標等について、国内外ですでに実施されている合理化や改善がなされず、旧態依然たる制度や条件に甘んじて、疑わないでいることが多いのも大きな欠陥である。

さらに、薬剤師が医療の場で他の医療職と協力する際に、薬剤師の存在意義を明確に発揮するには『薬学特有の基礎知識』が極めて効果的であるにもかかわらず、「臨床に関連の深い基礎薬学」の学習に関して、薬学の研究者・教育者側と、実務に従事している薬剤師との連携が必ずしも円滑ではない。ややもすると、互いに相手を理解しようとする努力に欠け、疎遠になっているところさえ見られる。これらはすべて、生涯学習を閉鎖状態にしている。速やかに是正しなければならない。

そのための有力な方策として、前回のコラムでも触れた日本薬学会の薬学教育部会の中での生涯学習活動が、来年度（2010年2月）より始まることとなった。上記3つの問題点に関して、現行の生涯学習環境の中に、諸外国や、他の医療職の長所を取り入れたり、また、薬学会から提供される学習の機会や情報を有効に活用したり、さらには、教学側と実務側との相互の密接な連携により、両者に有利な生涯学習体制が導入されたりすることなど、閉塞感の払拭が期待される。

来年早々に、広く「部会参加者」を募る予定と聞いている。部会活動には、日本薬学会の会員でなくとも参加できるので、ぜひ多くの実務薬剤師の参加（名前とメールアドレスの登録）を望みたい。そして、学会への要望、期待、あるいは学会との協力などを、薬学を学んだ者の共通認識として理解し実現する場として、部会活動を生かして頂きたい。

日本薬学会におけるこのような部会活動によって、わが国の薬剤師生涯学習が、一日も早く「鎖国状態」から脱け出し、新しい理念と計画に基づく、広い視野を持った、より良い学習体制が整備されることを期待する。

(2009. 12. 25)